

詩集

いのち・あらたに

矢野克子



詩集

いのち・あらたに

矢野 克子

著者紹介

沖縄県名護市に生まれる。

沖縄県立第一高女卒。沖縄県女子師範学校講習科終了。

「共悦」主幹・日本詩人クラブ会員・ペンクラブ会員・東京
国連婦人会常任理事

現住所 〒154 東京都世田谷区世田谷4-3-16

著書詩集

「太洋の母」	1943年	「鳴り止まず」	1972年
「いしずゑ」	1947年	「水平線」	1975年
「ウクライナの墓標」	1950年	「矢野克子詩集」	
「琉球」	1951年	（昭和詩大系）	1978年
「梯梧」	1956年	「桜吹雪」	1980年
「克子詩集」	1960年	「遙かなる道」	1982年
「ひめゆりの島」	1962年	「空よ」	1985年
「いのち」	1964年	「矢野克子詩集」	
「ヨーロッパの秋」	1965年	（日本詩人叢書⑦）	1988年
「風と波」	1968年	「サファイヤブルーの海」	1989年

詩集 いのち・あらたに

1989年11月20日発行 定価 2000円

著者 矢野克子

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

〒112東京都文京区音羽2-12-21

電話 大代表03(945)1111

印刷 信毎書籍印刷株式会社

製本 松栄堂製本

© Katsuko Yano 1989

序

矢野さんは真剣に、詩人としての一本の道を歩いて来られ、いまも歩いておられる。と言って、特に巧むことはなく、ごく自然に詩人としての生き方を貫いておられる。みごとという他はない。

こんどのお仕事は第十七詩集であると同って、襟を正す思いを持つ。こんどの十七本目の道標には「いのち・あらたに」と刻まれている。いのち・あらたなる報告であり、宣言である以外の何ものでもないのである。女史は永遠の若さと、みずみずしい詩魂で、沖繩を唄い、中国・ヨーロッパを唄い、ご自分の身辺を唄っておられる。そして常にいのち・あらたなる明日を目指しておられるのである。

■ 目次

序

井上 靖

詩集いのち・あらたに

六月の沖繩	11
季節の推移	13
満天の星	15
宇宙の夜明け	17
矢野経済三十周年讃歌	19
飛天	21
玄関の花	23
書斎の花	25
白い花	27

八十七年の太陽	30
軽井沢のサルビア	32
桜大樹	34
上高地	37
真夏の甲子園に涙あり	39
笑顔	41
沖縄の旅	43
沖縄の心	45
形見の洋傘 ばいりやうさん	48
その人	51
いのちの讃歌	53
春雪	55
梅雨の晴間	57
千載一遇	60
旅で結ばれる笑顔	62

彼岸会	64
珊瑚	66
山口栄次さん追悼	68
箱根夕靄	71
八月の花	73
江の島	75
中国の旅	77
万里の長城	
西湖中秋	
南京大学	
杭州	
中国新村	
学校参観と家庭訪問	
魯迅故居	
相性	89

詩集 風と波 より

風と波	93
吉祥天を迎えまつる	94
春鷗曲	97
カラコルム	99
三年目の十一月	101
十二月の太陽	103
霧は流れる	105
岬の十三夜	107
大空の立春	110
心に君の虹かけて	113
すみれの花	116

いのち.....119

雪あかり.....121

百日祭もすんで.....123

仙厓の掛け軸.....125

落花.....127

彼岸入り.....129

わたしは帰って行く.....132

下駄.....135

手.....137

病める夫(つま).....140

詩集 ヨーロッパの秋 より

メコン河.....143

フロレンスへの道.....147

サンマルコ広場.....149

ミラノへのハイウエー……………	152
ユングフラウ……………	155
ウィーン……………	157
シャンゼリゼーの夜は……………	161
アムステルダム楽師たち……………	163
ビッグ・ベン……………	165
ウインザー城の秋……………	167
オーロラ……………	170

後記

装画 故田崎廣助

詩集

いのち・あらたに

六月の沖縄

さやかな空

湧き出る雲

東京にない空に

みとれる私

岩にくだける

万座毛の海は

すみ透っていた

長い水平線は

たしかに「サファイヤブルーの海」

東支那海と

太平洋のただ中の沖縄

沖縄を離れて六十年

東京の人波の中で

コセコセしていた私は

人生の終りになって

いま新たにふるさと

沖縄の天地にたつて

世界の平和を希う祈りに

燃えるもの

季節の推移

ひらき初める

つぼみの下で花待つわたし

たゆみなくつづけられる自然のすがたを
しっかりとみまもるわたし

陽に向って

いっせいに咲き揃うさくらよ

花見だ、花を見にいらっしやい……と

心おきなく語りあう

いのちある日の悦びを

やがて花吹雪は

庭一面に限なく散りしいて

花の絨毯をしきつめる

季節の推移に驚くわたしは

音もなく若葉のしげりゆくさまに

たじろぐ